

「第6次小坂町総合計画後期基本計画」(案) パブリックコメントの実施結果について

No.	意見内容(要旨)	町の考え方・対応
1	<p>「人口減少社会の進行についての対策」 今後ますます高齢者の死亡により、自然動態による減少が加速されると考える。このため、出生者を増やす施策と合わせ、1日でも寿命を延ばす健康老人施策を展開する必要があると考えます。 人口減少により、就業人口が減り、企業活動が低下し、税収減、購買力の低下等町全体の活力がなくなります。全庁、全町あげてどのような対策が必要かマジに考える必要があります。</p>	<p>基本目標1にて、健康寿命を延ばすことも含めた施策としておりますので、それらを推進してまいります。 また、人口減少に伴う対策につきましても、計画全体に関わる内容となりますので、全庁あげて計画を推進してまいります。</p>
2	<p>「再生可能エネルギーの創出とそのエネルギーの地産地消」 ・再生可能エネルギー(いわゆる光熱費)創出の具体策 耕作放棄地(田、畑、原野など)を活用して植物油(廃食用油もOK)を生産し、そこからBDFを使用して電気と熱源を創出する。</p> <p>・地産地消の具体例 ①電気、熱源を町道及び町営住宅等の暖房及び融雪に使用する。 (町予算の除雪費用低減に寄与する) ②電気、熱源を地域施設及び住民に提供する。 (冷・暖房可能) ③電気、熱源を温室栽培等に使用する。 (南国植物等の栽培可能) ④製造したBDFを灯油ストーブの燃料として使用できないか? (多少の研究が必要か) ⑤製造したBDFを車輦等の燃料として使用し、できるなら一般販売する。 (既存の軽油、灯油等にどれほどの割合で混合できるか調査が必要) ⑥その他として、地域内で発生する生活ゴミや雑草・間伐材等を再生資源として収集してエネルギー化する。 (要するに焼却炉+発電機+廃熱ボイラ設備を稼働する)</p>	<p>施策4-1の主要施策において再生可能エネルギーの導入について記載しておりますが、小坂町過疎地域持続的発展計画や小坂町地球温暖化対策実行計画、小坂町バイオマスタウン構想のとおり推進してまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

<p>「小坂町企業のための求人難対策」 小坂町の企業が直面している「求人難」は、単なる労働力不足ではなく、「地域の暮らしやすさ」と「仕事のやりがい」が分断されていることに原因があるかもしれません。 企業全体での求人活動には限界がある。町として『小坂町で働くことの社会的価値』をプロモーションする共同採用活動への支援や、移住者の配偶者の就労支援など、世帯単位での受入体制を強化すべきであります。</p> <p>3 ①「職・住・遊」一体型の「お試し就業」 町の空き家や宿泊施設を利用し、実際に働きながら小坂町の暮らし（温泉、食、自然）を体験してもらう。 ②「小坂リサイクル・テック」ブランドの確立 地元企業連合で「小坂で働く＝地球を救う仕事」というメッセージをSNSや採用動画で発信。 ③配偶者（パートナー）の就職・生活支援 企業が採用を決める際、その配偶者の仕事探しも町や商工会がセットでサポートする「家族まるごころサポート体制」の構築。</p>	<p>人手不足はどの産業分野においても課題の一つとなっておりますが、施策3-4の主要施策のとおり、関係団体や企業等との連携を図りながら雇用の確保について推進してまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
<p>「求人難・人口減少対策のコラボ案」 小坂町の基幹産業であるDOWAグループとの連携を、単なる寄付や雇用に留めず、『福利厚生共有』や『配偶者の就労支援』といった踏み込んだ協力体制へと進化させるべきである。DOWAグループの持つリソースを『町のインフラ』として捉え直すことで、町内全体の求人難解消と定住促進を図るべきです。</p> <p>4 ①「DOWAパートナー就職支援」制度の確立 DOWAグループに採用された、あるいは既に働いている従業員の配偶者（パートナー）が、町内の他企業や役場等で優先的に働ける仕組みとして、DOWAの採用枠と、町内中小企業の求人情報をマッチングさせる「家族専用窓口」を設置する。 ②DOWA退職者の「セカンドキャリアマッチング」 DOWAを定年対処こうした高度なスキルを持つ人材（OB・OG）が町内の中小企業で技術指導や経営アドバイザーとして活躍できる仕組みとして、DOWAのOB人材バンクを町が運営し、人手・技術不足に悩む地元企業へ橋渡しする。</p>	<p>施策3-4の主要施策に記載のとおり、関係団体や企業等との連携を図りながら雇用の確保について推進してまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

「交流人口・関係人口の創出方法」

小坂町という「物語（ストーリー）」が強い町で、交流人口（観光）と関係人口（ファン）を増やすには、単なる「おもてなし」ではなく、「町の一部を自分たちの手で動かしている」という実感をいかに提供できるかが鍵です。

①交流人口：「一瞬の観光」を「深い体験」に変える

ただ建物を見て帰るのではなく、小坂の持つ「厚重的歴史資源」を使い倒す。

- ・「本物の運転士」ライセンス制度

「小坂町公認の機関車運転士」の資格を得られるようにし、リピーターを確実に作ります。

- ・明治モダン・フォトジェニック戦略

康楽館や鉱山事務所を舞台に、明治時代の衣装で町を歩けるサービスを本格化します。

- ・産業遺産「ナイトミュージアム」

ライトアップされた鉱山事務所でのディナーや、夜の康楽館でのジャズライブなど「夜の小坂」に滞在する理由を作ります。

②関係人口：「関わる動機」をデザインする

「たまに来る人」を「町の当事者」に変える仕掛けです。

- ・「都市鉱山」サポーター制度

リサイクル技術を軸に「不要なスマホを送ると、その中の金属が小坂で再生されるために使われる」という仕組みを作ります。

- ・トレイン・オーナー（支援者）制度

車両の維持管理（塗装や清掃）をボランティアで行う「車両オーナー」を募集します。

- ・「小坂ワイン」の共同オーナー

苗木の植え付けから収穫、ラベル作りまでを一緒に行うプランです。

③デジタル関係人口：物理的な距離を超える

現地に行けなくても、小坂町的意思決定や日常に参加してもらう仕組みです。

- ・DAO（自立分散型組織）：ターゲットはデジタルネイティブ層

「小坂町デジタル住民票」をNFTとして発行し、町の課題解決アイデアに投票できる権限を付与する。

- ・特産品×定期便：ターゲットはふるさと納税利用者

アカシアはちみつやワインを届けるだけでなく、生産者の日常を伝える動画をセットにして「遠くの家族」のような関係を築く。

- ・バーチャル小坂：ターゲットは若年層・海外ファン

メタバース空間に康楽館や鉱山事務所を再現。遠隔地からでもイベントに参加したり、交流できる場を作る。

施策3-2の主要施策へ記載のとおり、付加価値の高いツアーや体験メニューの提供により、それらを実感していただけるような取り組みを進めることで交流人口、関係人口の増加に努めてまいります。
その他、ご意見・ご提案につきましては、今回の計画には盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。

6	<p>「小坂町出身の若年層（子・孫世代）の還流・定着促進」 「いつかは小坂に」と考えている潜在的な帰郷希望者は少なくありません。彼らに対し、行政が「戻ってきてほしい」という明確なメッセージと具体的な支援策をセットで提示することで、血縁のネットワークを活かした持続可能なまちづくりを推進することを強く希望します。</p> <p>①「三世同居・近居」への強力なインセンティブ支給 子や孫が親の住む町内に戻り、同居または近居（徒歩圏内など）する場合の住宅リフォーム費用や引っ越し費用に対し、現行以上の手厚い助成を求めます。</p> <p>②「孫世代」を惹きつける教育・体験プログラムの充実 夏休み等の帰省期間に合わせ、小坂鉄道レールパーク屋康楽館を活用した「ふるさとサマースクール」等を開催し、孫世代に「小坂は楽しい場所」という記憶を植え付ける。</p> <p>③「DOWA関連・町内企業」との里帰り就職マッチング お盆や正月の帰省時期に合わせ、DOWAグループを含む町内企業の合同説明会や、現役社員との交流会（里帰り相談会）を定期開催する。</p> <p>④奨学金返還支援制度の対象拡大と周知 町に戻って就業する若者に対し、奨学金の返還を肩代わりする制度をさらに拡充し、特に対象職種を広げること。</p>	<p>施策4-4の主要施策に記載のとおり、若い世代のAターン促進のための支援を行ってまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今回の計画内に盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
7	<p>「観光客の滞在時間の拡大」 康楽館やレールパーク、十和田湖といった既存の点在する観光資源を「線」で結ぶ施策を強化してください。観光客が「見て終わり」にならず、町内での滞在時間を延ばす工夫が必要です。例えば、各施設を結ぶ二次交通（電気自動車のシェアリングやレンタサイクル等）の整備や小坂鉱山事務所周辺の歴史的景観を活かした夜間のライトアップ・夜間営業のイベント化などを計画に盛り込んでください。</p>	<p>施策3-2の主要施策に記載のとおり、観光客の滞在時間を延ばすために滞留型観光の推進に努めてまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今回の計画内に盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
8	<p>「関係人口（小坂ファン）を増やすデジタル戦略」 定住人口の増加だけでなく、町外に住みながら小坂町を応援してくれる「関係人口」を増やすためのデジタル住民票などの仕組みを導入してください。人口減少を止めるのは容易ではありませんが、ふるさと納税の寄附者や観光リピーターを「デジタル町民」として認定し、オンラインでの町政参加や、町内施設（康楽館など）の優待を受けられる仕組みを検討してはどうでしょうか。SNSを活用した広報も、単なる情報発信ではなく、ファンとの対話（双方向性）を重視した運用を計画に盛り込んでください。</p>	<p>施策4-4の主要施策に記載のとおり、二地域居住やふるさと住民登録制度の活用などにより関係人口の創出に努めてまいります。</p> <p>また、今回の計画において新たに施策として設けた「デジタル化（施策5-5）」は分野を超えて全庁で取り組む内容となっており、関係人口の創出に対しても既存のツール（SNS等）はもちろん、新たな活用方法も検討してまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今回の計画内に盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>

9	<p>「明治の産業遺産を活かした『クリエイティブ拠点』化 歴史的建造物を「保存」するだけでなく、テレワークや起業家が活用できる「生きた施設」として活用してください。小坂鉱山事務所などの素晴らしい景観を背景に、ワーケーション（仕事＋観光）スペースの整備を加速させてください。単なる観光客向けだけでなく、町外のクリエイターやIT事業者が短期滞在できる環境を整え、地元の学生や事業者と交流事業者と交流するワークショップを定期開催することを提案します。</p>	<p>施策3-2の主要施策にある「滞在型観光」との組み合わせの一つであり、その推進に努めてまいります。既にワーケーションスペースのひとつとして、十和田ふるさとセンターがありますが、その活用方法含め、環境整備とともにご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
10	<p>「スマート農林業の導入支援と後継者確保」 小坂町の基幹産業である農林業を守るため、体力負担を軽減する「スマート技術」の導入補助とセットで就農支援を強化してください。 高齢化により離農が進んでいますが、ドローンによる農薬散布や、アシストスーツの導入などは、若者にとっての「魅力的な職業」へ転換点になり得ます。これら高額な機器を町がレンタルする仕組みや共同利用のグループ結成を支援する体制を計画に盛り込んでください。</p>	<p>施策3-1の主要施策において、担い手の育成・確保として、また5-5において産業分野へのデジタル活用支援のひとつとしてスマート農業の推進に努めることとしています。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今回の計画内に盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
11	<p>「『農業×IT×加工』による高付加価値化と若手就農支援」 小坂町の農業は高齢化と担い手不足が深刻ですが、「作るだけ」の農業から脱却し、若者が「稼げる」仕組みを構築してください。 Society5.0と連動し、ドローンやAIを活用した「省力化スマート農業」の共同利用体制を町主導で構築すること。 「アカシアはちみつ」や「十和田湖産品」をAIによる需要予測に基づき、ふるさと納税向けに「超高単価ブランド」として加工・販売する「町営D2C（直接販売）センター」を設置すること。 単なる延命措置ではなく、「稼ぐ力」「守る技術」「楽しむ心」を三位一体で再構築し、税金の使途を「消費（コンサルへの委託）」から「投資（住民へのエンパワーメント）」へと転換することを切に望みます。</p>	<p>施策3-1の主要施策において、担い手の育成のための支援や特産品開発の支援を行うとしています。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今回の計画内に盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
12	<p>「『都市鉱山』ブランドを軸とした循環型経済（サーキュラーエコノミー）の確立」 世界有数の技術を持つ小坂製錬を中心とした観光産業を、単なる「一企業の活動」から「町の経済基盤」へと昇華させてください。 小坂町の経済再生には、過去の延長線上ではない「非連続な進化」が必要です。都市鉱山の技術という「世界レベルの資産」と、AIという「最新の武器」を掛け合わせ、住民が経済的な豊かさを実感できる計画の策定を切望します。</p>	<p>ご意見・ご提案につきましては、今回の計画内には盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。また、今回の計画に関する取り組みを進めることで、町民の皆さんが豊かさを実感できるよう努めてまいります。</p>

13	<p>「地域資源の『見える化』による観光・教育ブランドの確立」 小坂製錬関連企業が担う「都市鉱山からの資源回収」という世界最先端の取り組みを、町のアイデンティティとして再定義し、「環境聖地・小坂」としてのブランド力を強力に推進すべきです。</p> <p>すでに視察等は行われていますが、一般観光客や修学旅行生が「リサイクルの価値」を直感的に体験できる展示施設やデジタルコンテンツの整備を町と企業で共同推進してください。康楽館やレールパークを訪れる観光客が同時に「未来の地球を守る産業」に触れられる回遊ルートを設定し、知的探究心を満たす「サスティナブル・ツーリズム」を確立してください。</p>	<p>施策3-3の主要施策に記載のとおり、企業の視察受け入れ窓口となり、展示施設をもつ「あきたエコタウンセンター（県施設）」との連携を図り、企業研修や教育旅行の受け入れを強化し、観光振興を図ってまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
14	<p>「脱炭素社会（GX）に向けた『カーボンニュートラル・モデル地区』の共同構築」 DOWAグループが持つエネルギー技術や環境インフラを、町全体の脱炭素化（グリーントランスフォーメーション）に直接還元する仕組みを計画に盛り込んでください。</p> <p>関連企業の余熱利用や再生可能エネルギー技術を、公共施設や町民の生活基盤（例：冬期間の融雪、農業ハウスの熱源など）に活用する協働実証実験を検討してください。また、「企業が先進的なだけでなく、その恩恵を町民が実感できる先進的な町」としての姿を次世代への投資として明文化してください。</p>	<p>ご意見・ご提案いただいている企業とは、現時点で町とそのような事業を行うことは決まっておきませんので、計画に盛り込んでおらず、明文化しておりませんが、個別に策定した地球温暖化対策実行計画を進めていくうえで、今後の参考とさせていただきます。</p>
15	<p>「『環境・リサイクル産業』のトップランナー企業との体験型教育連携」 小坂製錬株式会社をはじめとする世界屈指のリサイクル技術を持つ地元企業と連携し、小坂町を「循環資源を学べる聖地」として確立すべきです。企業側のCSR活動（社会貢献）と連動し、工場見学やリサイクル工程を学べる「環境教育プログラム」を町と共同で開発してください。国内外の視察団や修学旅行生をターゲットに、企業城下町ならではの「産業観光ツアー」をパッケージ化し、庁内での宿泊・飲食に繋げる導線を作ってください。</p>	<p>施策3-3の主要施策に記載のとおり、企業の視察受け入れ窓口となっている「あきたエコタウンセンター（県施設）」との連携を図り、企業研修や教育旅行の受け入れを強化し、観光振興を図ってまいります。</p>

<p>16</p> <p>「町民参加型の再生可能エネルギー事業の推進」 ゼロカーボン達成に向け、町民が「当事者意識」を持てる仕組みが必要で行政や一部企業による取り組みだけでなく、町民一人一人の行動変容が不可欠です。</p> <ul style="list-style-type: none">・町民出資型太陽光発電の検討 住民が小規模方出資できる再生可能エネルギー発電所を計画し、売電収入の一部が住民の還元される仕組みを作ることで、地域経済循環と環境意識向上を同時に図る。・家庭向け省エネ診断の実施 希望する全世帯に対し、行政が無料で家庭のエネルギー消費を診断し、多様な省エネ方法や補助金活用方法をアドバイスする事業を計画に組み入れる。 <p>ゼロカーボン達成のためには、行政（役場）、企業（事業主）、町民がそれぞれの立場で役割を明確にし、連携することが不可欠です、行政はリーダーシップを発揮し、計画の策定、ルールの設定、支援の提供、そして自らの率先実行が求められます。 企業は事業活動におけるエネルギー消費の削減と、新たなビジネス機会の創出が期待されます。 町民は一人一人の日常生活における行動の変化が、ゼロカーボン達成の大きな力となります。</p>	<p>ゼロカーボン達成に向け、個別に策定した地球温暖化対策実行計画の取り組みを進めてまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
--	--

「小坂町にしかできない独自の資産を掛け合わせた他自治体には不可能な脱炭素施策での『製錬技術』『豊富な森林』『鉱山跡地』の利活用」

- ・都市鉱山リサイクルによる製造時CO2の大幅削減

小坂製錬株式会社の技術は天然鉱石から金属を作るよりもはるかに少ないエネルギーで金属を回収できます。

- ・「小坂産・低炭素メタル」のブランド化

リサイクルによって二酸化炭素排出を抑えて精製された金・銅を、環境意識の高い世界中のメーカー（スマートフォンやEVメーカー等）へ「小坂ブランド」として供給する仕組みを町が後押しします。

また、循環型社会の教育拠点化「脱炭素＝省エネ」だけでなく、「脱炭素＝リサイクル」という視点を世界へ発信、「グリーン・スタディツアー」を誘致し、交流人口を増やします。

- ・鉱山跡地や行動を活用した「次世代エネルギー貯蔵」

鉱山の町ならではの「地下空間」をエネルギー問題の解決に利用します。

- ・行動内の一定温度を活用した「天然の冷蔵・冷凍庫」

年間通じて気温が安定している坑道内を電力を使わない「超省エネ倉庫」として活用。ワインの熟成だけでなく、災害用の備蓄拠点やデータセンターの冷却コスト削減に利用します。

- ・圧縮空気エネルギー貯蔵（CAES）の実験場

再生可能エネルギーで得た田ry項で空気を圧縮し、巨大な行動内に貯蔵。必要な時に取り出す「地下の巨大蓄電池」としての活用を研究機関や企業と連携して模索します。

- ・「アカシア・森林資源」とバイオマスの循環

町面積の多くを占める森林と、町を象徴するアカシアを軸にします。

- ・小坂型バイオマス・エコシステム」の構築

未利用の町有林やアカシアの剪定枝を薪やチップとして地域内でエネルギー利用（公共施設の暖房等）します。これにより、化石燃料への依存を減らし、燃料費を地域内で循環させます。

- ・J-クレジット（森林吸収量）の販売による財源確保

小坂町の豊かな森林が吸収するCO2をクレジット化し、脱炭素を目指す大企業へ販売。得られた収益を町の福祉や教育、さらなる環境対策へ投資する「華僑・財政の好循環」を作ります。

- ・「十和田湖・樹海ライン」の完全電動化（EV化）モデル

国立公園への入口である強みを活かします。

- ・「カーボンニュートラル・ツーリズム」の聖地

樹海ラインをEV（電気自動車）優先道路とし、主要スポットに再生エネルギー由来の急速充電気を完備。「世界で最もクリーンにアクセスできる国立公園」として、環境意識の高い観光客を呼び込みます。

ご意見・ご提案いただいている企業とは、現時点で町としてそのような事業を行うことは決まっておりませんので、計画に盛り込んでおりませんが、個別に策定した地球温暖化対策実行計画を進めていくうえで、今後の参考とさせていただきます。

<p>18</p> <p>「ゼロカーボンシティ実現に向けた『産業・経済・生活』の統合戦略」 小坂町が「ゼロカーボンシティ」を宣言したことは、世界的な脱炭素の流れにおいて極めて重要です。しかし、計画案の内容は公共施設のLED化や住民への意識啓発といった一般的な項目にとどまっている印象を受けます。本町には世界屈指の環境・リサイクル産業（小坂製錬関連企業）が集積しており、「産業（GX）×観光×生活」を一体化させた小坂町独自のゼロカーボン簿を構築し、それを強力な町外発信（トップセールス）に繋げるべきです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小坂製錬等の関連企業と連携した「資源循環型GX」の推進 <p>「脱炭素」と本町の強みである「資源リサイクル（都市鉱山）」を掛け合わせ、小坂町をカーボンニュートラルの実証フィールドとして位置付けるべきです。</p> <p>関連企業の高度な環境技術や余熱、再生可能エネルギーを町内の農業施設（温室栽培等）や公共施設へ活用する「エネルギーの地産地消」スキームを具体化してください。また、企業側が取り組むGXとん町の施策を合流させ、「リサイクルによって排出CO2を抑制する町」としての数値を可視化し、国からの補助金獲得や企業誘致の武器にしてください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ゼロカーボンを「観光資源」および「返礼品」へ転換 <p>ゼロカーボンへの取り組み自体を、ふるさと納税の寄付獲得や観光客誘致のストーリーとして活用すべきです。カーボンオフセット返礼品として、小坂町の森林保全や再エネ事業による「J-クレジット」をふるさと納税の返礼品（企業のカーボンオフセット用など）として提供し、受け入れ額の画期的な向上を図ってください。また、エコ・ツーリズムとして「明治の遺産」と「最新の脱炭素技術」を同時にめぐるインフラツアーを確立し、環境意識の高い企業や修学旅行生を呼び込んでください。</p> <p>小坂町にとってゼロカーボンは単なる「義務」ではなく、「小坂製錬という世界的企業を持つ町としての大きなビジネスチャンス」であると強調することが他の自治体との差別化になります。コンサル任せではなく行政がイニシアチブを希望します。</p>	<p>ゼロカーボン達成に向け、個別に策定した地球温暖化対策実行計画の取り組みを進めてまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
<p>19</p> <p>「『産業遺産×次世代エネルギー』のハイブリット構想」 計画案では、歴史的資源（康楽館等）と脱炭素施策が切り離されています。これでは観光客にとって「どこにでもある環境施策」に見えてしまいます。</p> <p>康楽館や鉱山事務所周辺の街灯、空調電力をDOWAグループと連携した再生可能エネルギー（地熱やバイオマス等）で100%賄う「カーボンニュートラル歴史地区」を創出してください。</p> <p>小坂鉄道レールパークと明治百年通りを結ぶ移動手段として、外観はレトロ、中身は最新EVのシャトルバスを導入し、ゼロカーボンを「体験できる観光コンテンツ」に昇華させてください。</p> <p>小坂製錬等の優れた技術が「工場の外」で見えにくく、町民がゼロカーボンの恩恵を実感できていません。製錬工程で発生する余熱をパイプラインで近隣の公共施設や、川上地区等のビニルハウスへ供給する検討を計画に盛り込んでください。これにより、冬季間の暖房コストを抑えた「ゼロカーボン野菜」のブランド化が可能になります。</p> <p>また、町内各所にDOWAの技術で再資源化される「金・銀・レアメタル」専用の回収BOXをデザイン性の高い形で設置し、町民の協力度を可視化し、協力した町民に地域ポイントを付与する仕組みを構築してください。</p>	<p>後期基本計画の中では、観光や環境分野だけでなく、さまざまな分野にわたる施策を取り上げていること、現時点で町として記載の企業とそのような事業を行うことも決まっておられませんので計画に盛り込んでおりません。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

「世界唯一の『資源循環と明治浪漫のまち』としての独自戦略について」

・「世界一の都市鉱山・環境教育」の聖地化

小坂製錬をはじめとするDOWAグループの技術は世界トップクラスですが、町全体がその「技術の恩恵」を観光や教育に活かしていません。

・「SDGs・環境教育」のインバウンド、修学旅行誘致

「スマホから金が生まれる」プロセスを体験・見学できるツアーを町と企業で共同構築してください。単なる工場見学ではなく、歴史（鉱山事務所）から未来（リサイクル）まで一気通貫で学べる「世界唯一の環境教育プログラム」を確立すべきです。

・「リサイクル・インフラ」の町民還元

企業の排出熱や再エネを活用し、冬期間でもコストを抑えて運営できる「ゼロカーボン温水プール」や「熱利用型ハウス農業（川上地区等）」を実証・実装し、住むことのメリットを可視化してください。

・「明治浪漫×脱炭素」による滞在型観光の再定義

明治百年通りの景観は素晴らしいですが、現在は「立ち寄って終わり」の通過型です。

・「夜の明治百年通り」のプレミアム化

ゼロカーボン施策と連動し、夜間照明のLED化、デザイン化を徹底。宿舎だけが楽しめる「夜の康楽館・鉱山事務所」の特別ライトアップや地元産ワインを提供する「ナイトバル」を常設し、宿泊消費額を倍増させてください。

・観光大使の役割刷新

名誉職的な大使ではなく、歴史愛好家や環境系インフルエンサーを「特命営業大使」に任命し、特定の熱狂的なコミュニティに対してピンポイントでトップセールスを行わせるべきです。

・「稼ぐ自治体」への転換・ふるさと納税の戦略的リニューアル

近隣自治体に大きく水をあけられている現状は、PR不足以上に「小坂町にしか出せない逸品」の欠如です。小坂製錬で製錬された金・銀・銅を用いたインゴットや、精密工芸品を「DOWA×小坂町」の共同ブランドで展開してください。「世界を救うリサイクルメタル」という物語を付加価値にし、高額寄付者を独占すべきです。また、「康楽館の屋根葺き替え」「レールパークの車両動態保存」など使い道を明確にしたプロジェクトを町長自らが全国へトップセールスし、共感を得る寄付集めを行ってください。

施策3-3の主要施策に記載のとおり、企業の視察受け入れ窓口となっている「あきたエコタウンセンター（県施設）」との連携を図り、企業研修や教育旅行の受け入れを強化し、観光振興を図ってまいります。

また、ゼロカーボンに関連する部分については、地球温暖化対策実行計画の取り組みを推進してまいります。

その他、観光やふるさと納税に関するご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。

<p>21</p> <p>「官・民・住の『共創』による小坂町再生に向けた具体的提言」 小坂町は現在人口減少と地域経済の縮小という厳しい局面に立たされています。2022年の川上地区事業の停滞やふるさと納税額の低迷は各主体がバラバラに動いていることの現れです。後期計画では行政・企業・町民が互いの「強み」を共有し、具体的アクションに繋げる体制を構築すべきです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政がやるべきこと <p>行政は「事務作業」から脱却し、町の資産を外部に売り込み、住民の生活を守る「プロデューサー」になるべきです。町長自らがDOWA本社や国、有力企業へ直接足を運び、ふるさと納税の協力要請やゼロカーボン実証実験の誘致を年間目標（数値）として設定し、遂行を希望します。また、希望していない観光大使制度を廃止・再編し、インフルエンサーや専門家を「成果報酬型」で活用する等の抜本的改革を願います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・企業（小坂製錬関連等）がやるべきこと <p>企業は「工場という点」での存在から町の「インフラを支えるパートナー」へと役割を広げるべきです。「環境技術」の生活還元として、工場余熱の農業・融雪利用、再生可能エネルギーの地域供給などゼロカーボンシティ実現に向けた技術的バックアップを町に提供すること。また、製錬された貴金属を用いた返礼品の共同開発や、企業版ふるさと納税を通じた特定プロジェクトへの資金投入、人材の地域開放として従業員の高度な専門知識（DX、環境技術）を学校教育や商店街のデジタル化支援へ貸し出す制度の構築をしてほしい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町民はやるべきこと <p>町民は「行政にお任せ」の姿勢から、自ら町の価値を磨き、外から来る人を歓迎する当事者になるべきです。一人ひとりがSNS等で町の魅力（日常の風景、食、歴史）を発信する意識を持つこと。また、観光客や移住者に対し、企業城下町ならではの誇りを持って接すること。また、脱炭素施策や新しいモビリティの実装、デジタル化に対し、過去の慣習に固執せず、将来世代のために新しい仕組みを積極的に受け入れ、活用すること。</p> <p>これらにより、行政、企業、町民の三者一体の「小坂モデル」の構築をしてください。小坂町には他自治体にはない「世界レベルの産業」と「唯一無二の近代化遺産」があります。行政が「稼ぐ環境」を整え、企業が「技術と資源」を投じ、町民が「誇りを持って暮らす」。この三者の歯車がかみ合うための具体的な施策を後期基本計画に盛り込むことを強く求めます。単なる停滞で終わらせるか、再生への教訓とするかは、本計画にどれだけ「本気の覚悟」を詰め込めるかにかかっています。最後に「タイムスケジュール、数値目標、品質管理（PDCA）」の徹底を希望します。</p>	<p>ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p> <p>なお、計画の中では「協働による取り組み」として町民や事業者等に期待する役割を施策ごとに明記しています。</p> <p>また、これまでも重点プロジェクトを中心に成果をあげるため、進捗状況や効果を把握しつつ、その評価・検証作業を行うことによりPDCAサイクルを確立する取り組みを行っておりますが、引き続き行いながら、計画の推進に努めてまいります。</p>
<p>「『福祉・医療・高齢者』への具体的提言」 高齢者福祉を「コスト」として捉えるのではなく、町の歴史を知る「資産」を活かす機会と捉えなおすべきです。また、子や孫が安心して戻ってこられる条件は、自分たちの仕事だけでなく、「親がこの町で幸せに老い、自分たちがそれを過度に負担に感じない仕組み」があることです。この「家族まるごと安心モデル」を後期基本計画の核に据えるべきであると考えます。教育・子育て・住宅は、別々の施策ではなく、一つの「家族の物語」として繋がっているべきです。「最先端の教育が受けられ、子育ての苦労を町が共有し、冬も暖かく暮らせる家がある」。この約束を後期基本計画に具体策として盛り込むことで、町外に住む子や孫たちに「小坂に帰ろう」と決断させる強い動機を創出するのではないのでしょうか。</p>	<p>教育・子育て・住宅は、それぞれ施策を立てたうえで計画に記載をしておりますが、それらは計画の中で一体的に進めていくのものであり、繋がりがあがるものとして取り組みを進めてまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

22	<p>「医療・福祉の『スマート・アクセス』化」 人口減少下でも、高度な医療への接点を失わないための体制構築を求めます。医師不足をデジタルの力で補い、通院負担を軽減することで、高齢者が住み慣れた自宅で自立した生活を長く遅れるようにします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オンライン診療・服薬指導の拠点整備 <p>公民館やコンパクトエリア内の集合住宅に高齢者が操作に迷わず専門医と繋がれる「スマート外来ブース」を設置する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・バイタルデータの共有 <p>希望する高齢者にウェアラブル端末を配布し、日々の健康状態を町のh胡淵氏や家族が遠隔で見守る仕組み。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・デジタルアーカイブを活用した認知症予防（回想法） <p>デジタル化した町の古写真や鉱山時代の映像を、高齢者施設やサロンで活用し、記憶を刺激して認知症予防や多世代交流に役立てる歴史資料を用いた「小坂・回想プログラム」を実施。デジタルアーカイブを保存用としてだけでなく、高齢者の「生きがい」と「脳健康」のためのリソースとして活用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・孫、子世代への「語り部」活動 <p>高齢者が地域の歴史を若い世代に伝える場を設け、役割と生きがいを創出。</p>	<p>医療や福祉の面においても、今回の計画で新たに全庁をあげての施策として盛り込んでいる「デジタル化」を推進してまいります。</p> <p>その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
24	<p>「『孫世代』とのマッチングによる『多世代共生ホームシェア』」 空き家問題と高齢者の独居問題を同時に解決する、小坂町独自の住まい方提案です。施設に入る前段階の「緩やかな見守り」を地域コミュニティで担保することで、福祉予算の抑制と若者の定着を両立させます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「小坂・結（ゆい）サポート制度」の創設 <p>町外から戻ってきた孫世代や、町内企業の若手社員が、一人暮らしの高齢者宅の空き部屋に格安で住む（または近居する）。若者は住居費を抑えられ、高齢者は夜間の安心感や日常のちょっとした手伝い（電球交換や除雪など）を得られます。</p>	<p>施策4-4の主要施策にあるとおり、空き家の有効活用を進めるにあたり、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
25	<p>「デジタルアーカイブを用いた認知症・フレイル予防の『学校連携』」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「ふるさと自分史プロジェクト」を福祉プログラムの組み込み <p>地元の小中学生が、デジタルアーカイブされた写真をもとに高齢者に「昔の小坂」を聞き書きする。高齢者は「教える側」として自己肯定感が高まり（脳の活性化）、子どもたちは地域の歴史を深く学べます。福祉を「ケアする・される」の関係から、「知識を継承し合う」関係にアップデートし、高齢者の社会的孤立を防ぎます。</p>	<p>施策1-2の主要施策にあるとおり、介護予防事業のさらなる充実を図るうえで、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

<p>26</p> <p>「『医療・福祉コンシェルジュ』によるワンストップ窓口の設置」 ・「小坂暮らしの安心窓口」を物理的・デジタル両面で設置 コンパクトエリアの中心部（役場や診療所近隣）に、医療・介護・保険・生活支援（除雪や買い物）のすべての相談を受け付ける。「どこに相談したらいいかわからない」という不安を解消します。特に、町外に住む子供たちが「小坂にいる親のことが心配」になった際、ここ一点に連絡すれば状況が把握できる体制を作ります。呼び戻したい子・孫世代にとって、「親のケアがシステム化されていること」は帰郷を決断する際の最大の安心材料になります。</p>	<p>ご意見・ご提案につきましては、今回の計画には盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
<p>27</p> <p>「文化財のデジタルアーカイブ化により『生きた文化遺産』の継承と知的財産活用に関する提言」 小坂町および鹿角地域には、世界に誇れる鉱山・近代化遺産や民俗行事が多数存在しますが、その多くが紙資料や古い写真、あるいは高齢者の記憶の中だけに留まっています。このままでは、災害や世代交代によって貴重な歴史データが永遠に失われるリスクがあります。文化財は過去の遺物ではなく、未来を創るための「知的資源」です。デジタルアーカイブ化によって私たちの先祖が築いた文化を「生きたデータ」として次世代へ、そして世界へ繋ぐことは現代の行政に課せられた最大の責務の一つです。本計画においてデジタル技術を用いた文化財の抜本的な保存、活用策を盛り込むことを強く求めます。</p> <p>◆保存から「生きたデータ」への転換（デジタル化と蓄積） 3Dスキャンと高精細撮影：康楽館や鉱山事務所などの建造物、古文書、祭礼の道具等を3Dデータや高精細画像で記録する。 オーラルヒストリーの記録：地域住民が持つ「歴史の記憶」を映像と音声で記録し、AIを用いてテキスト化・インデックス化を行う。</p> <p>◆情報の「公開化」と「世界公開」（活用と公開） オープンデータプラットフォームの構築：蓄積したデータをインターネット上で誰もが閲覧、研究、教育に利用できるよう「オープンデータ」として公開する。 多言語AIガイド：デジタル化した情報をAIが各国の言語で解説し、世界中の研究者や観光客がアクセスできる環境を整える。</p> <p>◆「デジタル資産」による経済還流（価値の創出） メタバース・VR観光：デジタルアーカイブを活用し、遠隔地からでも小坂の文化を体験できる「仮想観光」やAR（拡張現実）を用いた現地での没入型体験を提供する。 NFT（非代替性トークン）等の活用：貴重な資料のデジタル版を限定公開、販売し、その収益を文化財の修復や維持管理費用に充てる「自立型モデル」を構築する。</p> <p>◆広域連携（鹿角地域）による文化圏の確立 小坂町単体ではなく、鹿角市との「鹿角地域文化財保護活用地域計画」をデジタル面でさらに進化させ、広域でのデータ共有、共同管理システムを構築してください。 「小坂・鹿角デジタル文化遺産ポータル」の創設：バラバラに管理されている文化、歴史情報を一元管理し、住民や観光客がスマホひとつで歴史を掘り起こせる仕組みを作ること。 AIによる「歴史対話型」アーカイブ：2017年の日大生の提言なども含め、蓄積されたデータにAIを学習させ、住民や子どもたちが歴史上の人物や学生と対話しながら未来を考える「教育ツール」として活用すること。</p>	<p>施策2-4に関連する個別計画の一つである「鹿角地域文化財保存活用計画」の取組の中で、デジタル化の推進、デジタルアーカイブの推進が基本方針に掲げており、それに基づき推進してまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

28	<p>「誰一人取り残さない」ための伴走型デジタル支援 行政手続きのオンライン化は歓迎しますが、操作に不安を感じる高齢層への配慮を最優先事項として計画に盛り込んでください。 スマホやPCを持たない、あるいは操作が苦手な住民が「不利益」を被ることがあってはなりません。役場窓口だけでなく、各地区の集会所やセパーム等において、地域おこし協力隊や学生ボランティアを活用した「スマホ巡回相談会」を定期開催し、対面でサポートする体制を明文化してください。</p>	<p>施策5-5の主要施策において、デジタルデバイト解消のため、高齢者等が行政サービスや日常生活においてデジタルの恩恵が享受できるよう、スマートフォンやオンライン手続きに関する学習機会を提供することを明記しております。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
29	<p>「冬期の安全を守る『除雪×デジタル』の活用」 豪雪地帯である小坂町において、デジタルの力で冬の生活の質を向上させてください。 除雪車の現在位置や主要路線の除雪完了見込みをリアルタイムで確認できる「除雪状況貸しかシステム」を導入してください。これにより、通勤・通学の判断や、高齢世帯の外出計画が立てやすくなり、雪国のストレス緩和と安全確保に直結します。</p>	<p>現時点でシステムの導入は予定しておりませんが、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
30	<p>「デジタルを活用した『関係人口』の創出と拡大」 人口減少を食い止めるため、町外に住みながら小坂を応援する「ファン」をデジタルでつなぎとめてください。「デジタル住民票」や「ふるさと納税者専用コミュニティ」を構築し、オンライン上で小坂町の施策に意見できたり、限定の特産品情報を得られたりする仕組みを作ってください。デジタルの力で実人口以上の「小坂町に関わる人」を増やす戦略を強化してください。</p>	<p>施策4-4の主要施策において、関係人口創出を推進することとしておりますが、その取り組みを進める上でご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
31	<p>「歴史的遺産の『デジタル・アーカイブ』と発信」 康楽館や鉱山事務所などの貴重な資産を世界中からアクセス可能にしてください。 建物や歴史資料を3Dデータ（デジタルツイン）化し、オンラインで仮想見学できるコンテンツを制作してください。これは観光振興だけでなく、万が一の災害時の復元資料としても極めて重要です。メタバース等での発信により、世界中の若年層に小坂町の歴史を知ってもらうきっかけを作ってください。</p>	<p>施策2-4に関連する個別計画のひとつである「鹿角地域文化財保存活用計画」の取組の中で、デジタル化の推進、デジタルアーカイブの推進が基本方針に掲げており、それに基づき推進してまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
32	<p>「DXによる『行政の透明化』と財政の可視化」 デジタルの導入により、税金の使い道を住民に分かりやすく示してください。後期基本計画の各事業の進捗状況（KPI）を町のホームページでグラフ化するなどしてリアルタイムに公開してください。財政状況や事業成果を「見える化」することで、住民の行政への参画意識を高めてDXを推進してください。</p>	<p>毎年計画内に含まれる総合戦略のKPIについては、町の産学官金労の各分野の委員で構成する「小坂町振興計画審議会」にて報告をしております。また、財政状況についても町の広報等で報告をさせていただいておりますが、今後町民の皆さんにも「見える化」が感じられるよう努めてまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

33	<p>「AIオンデマンド交通の『電話予約不要』化と利便性向上」 小坂町のような公共交通に限られる地域では、異動のDXが不可欠です。現在の予約制交通をスマホアプリから直感的に「今すぐ呼べる」システムへアップグレードしてください。スマホが使えない高齢者のために「ボタン一つで自宅に迎えが来る専用デバイス」を希望世帯に配布、または自宅のテレビ画面から予約できる仕組みを検討してください。これにより、通院や買い物の心理的ハードルを劇的に下げることができます。</p>	<p>令和8年度に新たな地域公共交通計画の策定を予定しており、当計画の期間中において地域公共交通へ新たなシステムの導入をはじめとするDX化の形を構築していくこととなります。利用者の声や利便性向上、費用対効果や運行事業者の受入体制などさまざまな課題を踏まえた上で、これからの将来町にとってどのような形がよいか検討を行ってまいります。その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
34	<p>「除雪車ナビと『雪かきマッチング』アプリ」 雪国最大のストレスである除雪にデジタルの光を当ててください。全ての除雪車にGPSを搭載し、「自分の家の前の通りがいつ除雪されるか」スマホや役場の大型モニターでリアルタイム確認できるシステムを導入してください。「自宅の雪かきをしてほしい高齢者」と「アルバイトしたい若者や空き時間の業者」をつなぐ小坂町独自の「雪かきマッチングアプリ」を構築してください。決済に町独自のデジタル地域通貨を導入すれば、地域内経済も循環します。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたシステム等の導入は予定しておりませんが、施策4-6で掲げている雪対策を進める上でDX化が必要な部分については、検討してまいります。</p>
35	<p>「オンライン診療と『デジタル見守り』」 通院が困難な冬期間や一人暮らしの不安を解消します。地区の集会所（セバーム等）を「オンライン診療スポット」とし、看護師が常駐または巡回しながら、大病院の専門医と大型画面で診察を受けられる仕組みを構築してください。電気や水道の使用量データを活用した「AI見守りシステム」を導入し、異常（長時間水が使われていない等）があれば、自動的に近隣住民や役場へ通知が飛ぶ体制を整えてください。監視カメラではない、プライバシーに配慮した安心を提供できます。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたシステム等の導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
36	<p>「康楽館を舞台にした『メタバース修学旅行』の誘致」 康楽館の内部を精密な3Dスキャンで再現し、世界中の学生がVR（仮想現実）で「明治の芝居小屋」を体験できる教育プログラムを販売してください。仮想空間で小坂町を訪れた人が、ふるさと納税を通じて「実際の康楽館の椅子」のオーナーになれるなどの体験を設計してください。バーチャルでの訪問が、将来的なリアルな観光や移住につながる「きっかけ」を戦略的に作ってください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたプログラム等の導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
37	<p>「役場に来なくていい」役場とプッシュ型通知 町民がわざわざ役場へ足を運ぶ手間をゼロにします。申請が必要な給付金や手続きについて、町から体操者へスマホで直接通知し、「氏名・住所を何度も書かずにスマホの承認ボタン一つで完了する」ワンスオンリーの行政サービスを実現してください。「私の世帯で受けられる補助金」が自動的にリストアップされるパーソナライズされたマイページを住民毎に提供してください。</p>	<p>施策5-5の主要施策に記載のとおり、町民サービスの利便性向上のため、行政手続きのオンライン化を推進してまいります。現時点でご意見・ご提案いただいたシステム等の導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>

38	<p>「デジタル化・DX推進に関する提言の総括」 小坂町のDXは、単に紙をデータに置き換えることではなく、「高齢者が安心して暮らせること」や「町の宝を未来へ繋ぐこと」のためにあるべきだと考えます。技術を導入すること自体を目的とせず、住民の「不便」を解消し、「希望」を生むためのじたる活用を強く望みます。小坂町のDXにおいて重要なのは、『最新技術を導入すること』ではなく、『雪の日の不安を減らし、移動の不便を解消し、誇れる歴史を世界へ届けること』にあると考えます。特に高齢者がスマホを持たずともデジタルの恩恵が受けられる『ボタン一つでのデマンド予約』や冬の生活に不可欠な『除雪可視化システム』など、小坂町の痛みを解決するDXを後期計画の最優先事項として具体化し町民に周知徹底をお願いします。</p>	<p>今回の計画より施策の項目としてデジタル化を設けており、町民の皆さまへその重要性をしっかりと当計画で周知徹底するよう努めてまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
39	<p>「グループウェア導入による『情報共有の迅速化』と「脱・紙文化」 役場内のコミュニケーションをアナログからデジタルへ移行し、意思決定のスピードを劇的に向上させてください。全職員が利用できるグループウェア（チャット、スケジュール共有、ファイル共同編集機能）を導入し、電話や紙のメモ、対面会議に依存する文化を改めてください。部局を跨いだ連携がスムーズになり、住民からの問い合わせに対しても「担当者が不在でわからない」という事態を防げます。</p>	<p>すでに導入しているシステムもありますが、施策5-5に記載のとおり、庁内外のデジタル化を推進し、行政事務の効率化・省力化を図ってまいります。</p>
40	<p>「RPA（業務自動化）による『定型業務の削減』」 人間がやらなくてもいい事務作業はロボット（RPA）に任せ、職員が「住民の相談に乗る」「政策を考える」というクリエイティブな業務に集中できる環境を作ってください。ふるさと納税のデータ入力、給付金の申請チェック、定型的な伝票処理などにRPAを導入してください。入力ミスなどのヒューマンエラーが排除され、深夜までの残業代（公金）の削減にも直結します。</p>	<p>施策5-5の主要施策に記載のとおり、RPA等の活用により、庁内外のデジタル化を推進し、行政事務の効率化・省力化を図ってまいります。</p>
41	<p>「AI（ChatGP/Gemini等）の戦略的活用による『文書作成の効率化』 膨大な計画書や通知文の作成をAIが下書きすることで、業務時間を大幅に短縮してください。生成AIのセキュアな利用環境を整備し、議事録の要約、答弁資料の作成、広報誌の文章作成などをAIがサポートする仕組みを構築してください。職員の事務負担が軽くなることで現場（集落）へ出向く時間を増やすことが可能になります。</p>	<p>施策5-5の主要施策に記載のとおり、AI等の活用により、庁内外のデジタル化を推進し、行政事務の効率化・省力化を図ってまいります。</p>
42	<p>「データの『オープンデータ化』と『エビデンスに基づく政策（EBPM）』」 「勤」や「例年通り」ではなく、正確なデータに基づいて税金の使い道を決めてください。役場内に蓄積された統計データや住民ニーズを数値化し、どの施策がどれだけの効果を生んだかを分析、公表してください。また、公開可能なデータは「オープンデータ」として民間に開放し、新たなビジネス創出を支援してください。</p>	<p>オープンデータについては現在バス情報のGTFSデータを公開していますが、今後公開可能なデータについては検討させていただきます。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>

43	<p>「『DX推進担当』の権限強化と外部専門人材の登用」 DXはITシステムの導入ではなく、「組織の変革」です。是を推進するための強力なリーダーシップを求めます。総務課等の既存部署の兼務ではなく、町長直轄の「デジタル推進室」を設置し、外部からICTの専門家（副反応を恐れない改革者）をCTO（最高技術責任者）として任用してください。</p>	<p>計画内において現時点で予定していない組織改編等に関することは記載いたしません、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
44	<p>「エネルギー自給と防災のスマート化」 人口減少下でインフラを維持するため、町の資源を活かした「強靱な町」を目指す提言です。 ・再生可能エネルギーの地産地消 小坂町の豊かな森林資源を活用した「バイオマス発電」や地熱、小水力発電をさらに推進し、役場や避難所などの重要拠点に「自立型電源」を確保してください。 ・AIによる防災・減災システムの構築 豪雨や大雪などの際、AIが河川の水位や積雪量をリアルタイムで予測し、危険なエリアの住民へ個別に自動電話や通知で避難を促すシステムを導入してください。「災害に強い町」という安心感は、定住を決める大きな要因になります。</p>	<p>防災に限らず全体として、施策4-1の主要施策に記載のとおり、地域資源を活用した再生可能エネルギーの導入をめざすことと、総合戦略の戦略目標4に記載のとおり、災害対応におけるデジタル化を通じ、災害状況の迅速な把握や情報提供手段の充実を図ってまいります。また、関連する個別計画である小坂町地域防災計画のとおり、推進してまいります。その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
45	<p>「若者・デジタル住民による『デジタル議会』の創設」 「誰が決めたか分からない計画」ではなく、現役世代の声を直接反映させる仕組みです。 ・オンライン・パブリックコメントの常設 今回のような意見募集を数年に一度のイベントにするのではなく、LINE等で24時間、365日、町へ提案を送れる「デジタル目安箱」を設置し、AIがそれをカテゴリー別に集計して町長へ届ける仕組みを構築してください。 ・若者会議へのAIファシリテーター導入 中高生や20～30代が町の未来を話し合う際、AIが予算や過去のデータに基づいたアドバイスを行う「スマート会議」を実施し、若者のアイデアを具体的な政策に繋げてください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたAI活用の導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
46	<p>「役場内部のDX推進と業務効率化による行政機能強化に関する提言の総括」 住民が「小坂町は変わった」と実感するためには、窓口の裏側にある役場の業務そのものが最新鋭である必要があります。職員がテクノロジーを使いこなし、生き生きと働く姿こそが、町の活力を生む原動力になります。税金を1円たりとも無駄にしないための「役場内DX」を最優先課題として位置付けることを強く求めます。</p>	<p>今回の計画の中で、施策の項目として新たに設けたデジタル化の主要施策として掲げているデジタル技術を活用した行財政運営の効率化を推進してまいります。</p>

47	<p>「スマホを持たなくても恩恵を受けられる仕組みの構築」 ICT活用を「住民側のスマホ所有」に依存させない工夫を計画に盛り込んでください。操作が困難な高齢者も多い中で、スマホありきのサービスは格差を生みます。自宅のテレビ画面を活用した「双方向の健康相談」や、ボタン一つで配車や緊急通報ができる「専用ワンタッチ・デバイス」の貸与など、操作を極限まで簡略化したICT環境を整備してください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたシステムの導入は予定しておりませんので計画内には盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
48	<p>「対面サポートによる『デジタル・コンシェルジュ』の定例化」 デジタル化を進める一方で、それを教える「人」の配置をセットで考えてください。一度の講習会では定着しません。各地区の集会所（セパーム等）や郵便局など、高齢者が日常的に立ち寄る場所に、いつでも操作を聞ける「デジタルコンシェルジュ（地域おこし協力隊や学生ボランティア等）」を配置してください。「お茶を飲みに行くついでにスマホを習う」といった、コミュニティと誘導した支援体制を求めます。</p>	<p>施策5-5の主要施策に記載のとおり、地域で支え合うデジタルサポーター育成を推進してまいります。 その他、ご意見・ご提案につきましては、今後の参考とさせていただきます。</p>
49	<p>「生活の安全を支える『スマート見守り』の導入」 監視カメラではなく、プライバシーに配慮した技術で安心を支えてください。独居高齢者が増える中で、電気・水道の使用量や人感センサーが「日常の活動」を検知し、異常時のみ役場や親族へ通知される「さりげない見守りシステム」を希望世帯へ導入してください。これにより、本人の自尊心を守りつつ、冬期間の急病や孤立を未然に防ぐことができます。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたシステムの導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
50	<p>「医療・福祉の『遠隔サービス』の本格運用」 雪道や足腰の不安により通院が困難な問題をICTで解決してください。専門医の診察を自宅や近くの集会所から受けられる「オンライン診療」の普及を加速させてください。また、リハビリや認知症予防の体操を自宅にしながら画面越しに専門家と行える「オンライン・デイサービス」の試行を検討してみてください。</p>	<p>ご意見・ご提案につきましては、今回の計画には盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
51	<p>「『お楽しみ』と『やりがい』を創出するデジタル活用」 ICTを単なるツールではなく、生きがい作りに活用してください。康楽館の芝居のライブ配信や、離れて暮らす孫とのビデオ通話などを、町が積極的に設定・支援してください。また、高齢者が持つ地域の歴史や料理の知恵をデジタル動画で記録する「町民アーカイブ」の制作など、高齢者がデジタルを使って表現、発信する場を作ってください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたライブ配信の設定やビデオ通話の支援、アーカイブの制作は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>

52	<p>「『郵便局・商店・集会所』を拠点にした対面サポート」 役場まで行かなければならない現状を変え、日常生活の動線上でサポートを受けられるようにします。郵便局や地元の商店、セバーム等に「デジタル相談タブレット」を設置し、ボタン一つで役場の専門スタッフやオペレーターと顔を見て話せる仕組みを作ってください。地域おこし協力隊に「デジタル推進員」の枠を設け、週に一度決まった時間に各集落を回る「スマホ相談カフェ」を開催してください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたタブレットの導入、地域おこし協力隊の採用は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
53	<p>「『スマホ不要』の専用デバイス配布」 スマホの小さな画面や複雑なメニューが障壁となっている方への対策です。独居世帯や操作に不安のある世帯へ「3つのボタン（呼ぶ・話す・見守り）」だけの専用スピーカー端末（スマートスピーカーのカスタム版）を配布してください。「タクシーを呼ぶ」「薬の時間を教えて」「孫と電話」など、声だけで操作できる環境を整え、機械に合わせるのではなく「機械が住民に合わせる」環境を実現してください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいた端末の導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
54	<p>「ICTによる『買い物・通院』の完全予約代行」 デジタルが「足」の代わりにする仕組みです。AIオンデマンド交通の予約を、近所の「デジサポ店（認定された商店やガソリンスタンド）」で代行できるシステムを作ってください。自分で予約できない高齢者の代わりに、近所の人が予約してあげると、そのサポーターに町独自のポイント（小坂ポイント等）が付与される「共助型ICT」を導入してください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたシステムの導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
55	<p>「各集落の集会所を『ミニ診療所』化」 自宅でのオンライン診療が不安な方への対策です。各地区の集会所に、大型モニターと測定器（血圧・体温等）を備えた「オンライン健康室」を整備してください。決まった曜日にそこへ行けば、看護師の補助を受けながら大館市や秋田市の専門医の診察を受けられるようにし、雪道の長距離通院のリスクをゼロにしてください。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいた整備は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>

56	<p>「高齢者のICT利活用支援に関する提言の総括」 小坂町の高齢者にとって、デジタル技術（ICT）は「難しいもの」ではなく、冬の寒さや移動の困難、孤独を解消するための「心強い杖」であるべきと考えます。 小坂町のICT活用は、デジタル化そのものが目的ではなく、「高齢者が一人の人間として、雪の日も安心して楽しく、繋がりを持ってくらし続けること」を目的とすべきです。技術を「人に寄り添う温かい道具」として活用する、小坂町らしい先進的な計画となります。 高齢者のICT支援において、「スマホ教室」を開くだけでは不十分です。 ①声やボタンだけで完結する専用端末の導入 ②集会所を活用した「看護師付きオンライン診療」 ③予約を代行した住民にポイントを付与する「共助システム」 このように「技術は最先端、操作は最単純」な仕組みを小坂町独自の福祉モデルとして構築してください。デジタルを「若者の道具」から「高齢者の杖」へと再定義することを希望します。</p>	<p>施策5-5の主要施策に記載のとおり、デジタルデバイト解消のため、まずは学習機会の提供をすることで関心を高め、入口を広げる取組を推進してまいります。 ご意見・ご提案いただいたシステム等の導入は現時点で予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
57	<p>「『対話型AI』による孤独解消と心のケア」 一人暮らしの高齢者が増える中で、AIを「いつでも話し相手になってくれる同居人」として活用する仕組みを提案します。挨拶や世間話、昔話に応じる「音声対話AIアプリ」の導入、講習を行ってください。AIは何度同じ話をしても嫌な顔をせず、24時間いつでも耳を傾けてくれます。「誰かと話したい」という欲求が満たされ、認知症予防や精神的な安定（ウェルビーイング）に繋がります。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたアプリの導入は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
58	<p>「『画像生成・加工AI』による創作活動の推進」 AIを使って、体力的な制約を超えた「表現の喜び」を提供してください。「康楽館で劇を演じている自分の姿」や「昔の活気ある小坂鉦山の風景」を言葉（声）だけで絵にする画像生成AIワークショップを開催してください。 自分の想像が形になる感動を味わい、作成した画像をSNSや地域の展示会で共有することで、社会との新しい繋がりが生まれます。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたワークショップの開催は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
59	<p>「『AI自分史・思い出復元』プロジェクト」 高齢者が持つ豊かな経験を、AIの力で次世代に残す活動を推進してください。 昔の白黒写真をAIでカラー化したり、断片的な思い出話をAIが整理して文章化（自分史作成）したりするサービスを、町の文化事業として実施してください。 自分の人生を肯定的に振り返る「回送法」としての効果があり、家族や若者との会話のきっかけになります。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたサービスの実施は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>

60	<p>「『植物・野鳥判定AI』を活用した外出の楽しみ」 小坂町の豊かな自然を、AIという「物知りな相棒」と楽しむ仕組みです。散歩中に見つけた花や鳥の名前を写真から即座に教えてくれるAIアプリの使い方を広めてください。また、それらを活用した「AI自然探索ウォーキング大会」を十和田湖周辺や樹海ラインで実施してください。日常の散歩が「発見と学習の場」に変わり、外出する意欲と健康増進が同時に達成されます。</p>	現時点でご意見・ご提案いただいたイベントの実施は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。
61	<p>「AI活用のための『多世代交流拠点』の整備」 「教える・教わる」の関係を通じて、若者と高齢者の絆を深めてください。地元の小中高生が「AI先生」となり、高齢者に最新アプリの楽しさを教えるイベントを定期開催してください。高齢者は新しい刺激を得て、若者は地域の先輩から歴史を学ぶ。デジタルを介した「現代版の結（ゆい）」の精神を育みます。</p>	現時点でご意見・ご提案いただいたイベントの実施は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。
62	<p>「『声』だけで綴る、AI自分史作成サービス」 文字が書けなくても、AIとの「おしゃべり」を通じて、一冊の自分史や家族へのメッセージ本を作ります。高齢者がAIスピーカーやスマホに向かって、鉱山時代の思い出や子育ての苦労を自由に話すと、AIがそれを感動的な文章に整理・校正し、印刷までサポートする仕組み。「自分の生きた証が形になる」という深い満足感を提供し、家族との絆を深めます。</p>	現時点でご意見・ご提案いただいたサポートの実施は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。
63	<p>「『思い出カラー化・高画質化』ワークショップ」 押し入れに眠っている古い白黒写真をAIで鮮やかに復元し、当時の記憶を呼び起こします。役場やセバームに「AI写真復元コーナー」を設置。白黒写真をスキャンするとAIが当時の色彩を推測してカラー化し、ぼやけた写真を鮮明にします。写真が綺麗になった瞬間の驚きと、そこから始まる「当時はこんな色の服を着ていた」という昔話の盛り上がり、脳の活性化（回想法）に直結します。</p>	現時点でご意見・ご提案いただいたコーナーの設置は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。
64	<p>「『AI画伯』と描く、明治モダンの小坂」 絵を描く自信がなくても、AIを「筆」にして芸術家になれるプロジェクトです。「康楽館」「鉱山事務所」「アカシアの花」などの言葉を声で入力すると、AIが「油絵風」や「水彩画風」の美しいを瞬時に描いてくれる体験会。「自分には才能がない」と思っていた人が、数秒で素晴らしいアートを生み出せる。この「全能感」は、高齢者の新しい趣味や生きがいの発見に繋がります。</p>	現時点でご意見・ご提案いただいたイベントの開催は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。

65	<p>「AIアバター（分身）による『孫とのバーチャル交流』」 離れて暮らす家族と、最新技術で楽しく繋がります。 スマホアプリで自分の写真を撮り、AIで動く3Dアバター（キャラクター）を作成。そのキャラクターを通じて孫とビデオ通話したり、バーチャル空間で一緒に康楽館を散策したりする体験。 「おじいちゃん、おばあちゃん、すごい！」と孫から尊敬され、会話が弾むことで、世代間のデジタル格差が「楽しさ」で埋まります。</p>	<p>現時点でご意見・ご提案いただいたキャラクターの作成等は予定しておりませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>
66	<p>「AIアプリの利活用による高齢者の『楽しさ・喜び』推進に関する提言の総括」 小坂町の高齢者の皆さんが、AI（人工知能）という最新技術を「難しくて怖いもの」ではなく、「毎日を彩り、孤独を癒やし、新しい自分を見つける魔法の道具」として使いこなせる町。そんなワクワクする未来に向けた意見書として提出させていただきます。 AIアプリは、文字入力が苦手でも「声」で操作でき、写真一枚から思い出を語り合えるため、実は高齢者と非常に相性が良いツールです。 高齢者がAIを使い、「自分にもこんなことができるんだ！」という自己肯定感とワクワク感を得ることができます。 AIの利活用は、効率化のためだけにあるではありません。小坂町の高齢者の皆さんが、テクノロジーの力で「昨日より今日がもっと楽しい」と感じられること。それこそが、Society5.0が目指すべき真の姿であり、小坂町が日本で最も「AIで高齢者が笑う町」になることを強く望みます。 AI技術を単なる効率化の道具ではなく、「高齢者の尊厳と喜びを取り戻すためのエンターテインメント」として活用すべきです。具体的には「音声対話による自動自分史作成」や「古い写真のAIカラー化復元」といった、住民の心に直接響くプログラムを計画に盛り込んでください。小坂町の高齢者が、最新のAIを「おもちゃ」のように楽しみながら使いこなし、若者と技術で交流する小坂町の未来に臨みます。</p>	<p>施策5-5の主要施策に記載のとおり、デジタルデバイト解消のため、まずは学習機会の提供をすることで関心を高め、入口を広げる取組を推進してまいります。 ご意見・ご提案いただいたプログラムにつきまして、今回の計画内に盛り込みませんが、今後の参考とさせていただきます。</p>